調査研究報告　「富士山村山口登山道の現状について」

1.はじめに

富士登山の歴史を紐解くと、その中でひときわ大きな役割を果たした登山道のひとつに、村山口登山道の名を見つけることができる。現在、地図の上からはその名を消してはいるが、かつて富士登山のメインルートとなった登山道であった。近年、この幻の登山道は多くの人々からの注目を浴びるようになっている。

本稿は、平成 17 年（2005）度に行われた、田子の浦から村山口登山道を通って山頂を目指すという富士山完登プロジェクト（平成 17 年 4 月 9 日、5 月 22 日、7 月 9 日、主催　特定非営利活動法人富士山クラブ）に同行した際の登山記録、および富士山倒木帯内の石造物調査（平成 17 年 12 月 6 日）の記録をまとめ、現在の村山口登山道の状況について報告するものである。

2.村山口登山道の歴史的背景

富士山は、古来からその美しさを称えられてきた。その一方で、噴火の記録がたびたび残されている[i]ことからも分かるように、富士山は恐怖や畏怖の対象として人々にとらえられていた山でもあった。静寂と噴火を繰り返す富士山は、神の住む山として山麓の人々の信仰の対象となってきた。こうした信仰はやがて、浅間大神（あさまのおおかみ）を祀る浅間信仰の成立へとつながっていったとされている（富士市立博物館、1995：７）。

特に、静岡県富士宮市にある富士山本宮浅間大社は、大同元年（806）、時の征夷大将軍・坂上田村麿（さかのうえたむらまろ）によって創建された浅間神社[ii]で、後に全国各地に広がる浅間信仰の中心となる神社とされている（富士吉田市教育委員会、2003：1）。

一方で、富士山は、古来からの山岳信仰と空海（くうかい）や最澄（さいちょう）、円仁（えんにん）らが日本に伝えた密教が融合して形成された山岳修験が盛んになるとともに、崇拝して信仰する山から修行の場としての山へと変化していくことになる。その中でも、富士市岩本の実相寺（じっそうじ）を建立した智印上人（ちいんしょうにん）の弟子・末代（まつだい）は、富士上人とも呼ばれる修験僧で、数百回にものぼる富士登山を繰り返し、富士山頂に大日寺を造ったといわれる人物である。その後、末代は即身仏となって、自ら富士宮市村山の浅間社のとなりに建立した大棟梁権現（だいとうりょうごんげん）に祀られた[iii]と伝えられている。こうして、末代を祀る大棟梁権現、大日如来を祀る大日堂、浅間神を祀る浅間神社を併せた富士山興法寺（こうほうじ）が富士山での修験道の拠点となり、村山から富士

山へと登る村山口登山道は多くの修行者で賑わいを見せるようになる。

これ以降、村山修験は、富士山で修行を行った修験者[iv]によって全国に広まっていくこととなる。その結果、一般の人々は修行を積んだ修験者に願いを託し、様々な奉納物を添えて代行登山をする風習が生まれたとされている。こうした中には、浅間神社の宮司が仏像を奉納するなど、仏教と神道の協力関係のもと、富士山における信仰が維持されていたことが読み取れる。

また、奉納物の願主や奉納場所に注目してみると、時代が古いほど、富士山より西側に住む人々からの奉納が多く見られる（富士宮市史編纂委員会、1971：526）。その後、16 世紀の初頭に奉納場所として吉田口という地名が認められるようになると、武州や上州といった関東近辺の奉納も増加してくる傾向が見て取れる。このことから、関西を中心に広がった初期の村山修験が時代とともに関東へとその勢力を広めていったことが読み取れる（富士市立博物館、1992：13）。そして、このことは、爆発的な発展を見せる江戸の富士講の基礎となるのである。

こうして、幅広いネットワークを持つことになった村山の修験道は、情報網を手に入れたい武将にとって重要な存在となり、また、村山の修験道も武将の庇護を得れば活動をより行いやすくなるといった点から、室町時代から戦国時代にかけて、今川氏との密接な関係を築くようになった。そして、この時期が村山修験のもっとも栄えた時代であった。

しかし、江戸時代に入ると、村山修験の活動が著しく狭くなってくる。その背景には、富士講の祖と呼ばれる長谷川角行（はせがわかくぎょう）が、富士山信仰を独自の教えを持って説き、その教えが食行身禄（じきぎょうみろく）や村上光清（むらかみこうせい）といった弟子の活躍によって広く庶民に受け入れられるようになり、富士山は修行の山から参詣という登拝山へと移行していったことがある（富士吉田市教育委員会、2001：5）。こうした登山者のうち、関東からの登山者は、須走（東口）、須山（南口）吉田（吉田口）に吸収され、村山は、関西からの登山者に絞られることになったのである（富士宮市史編纂委員会、1971：547）。

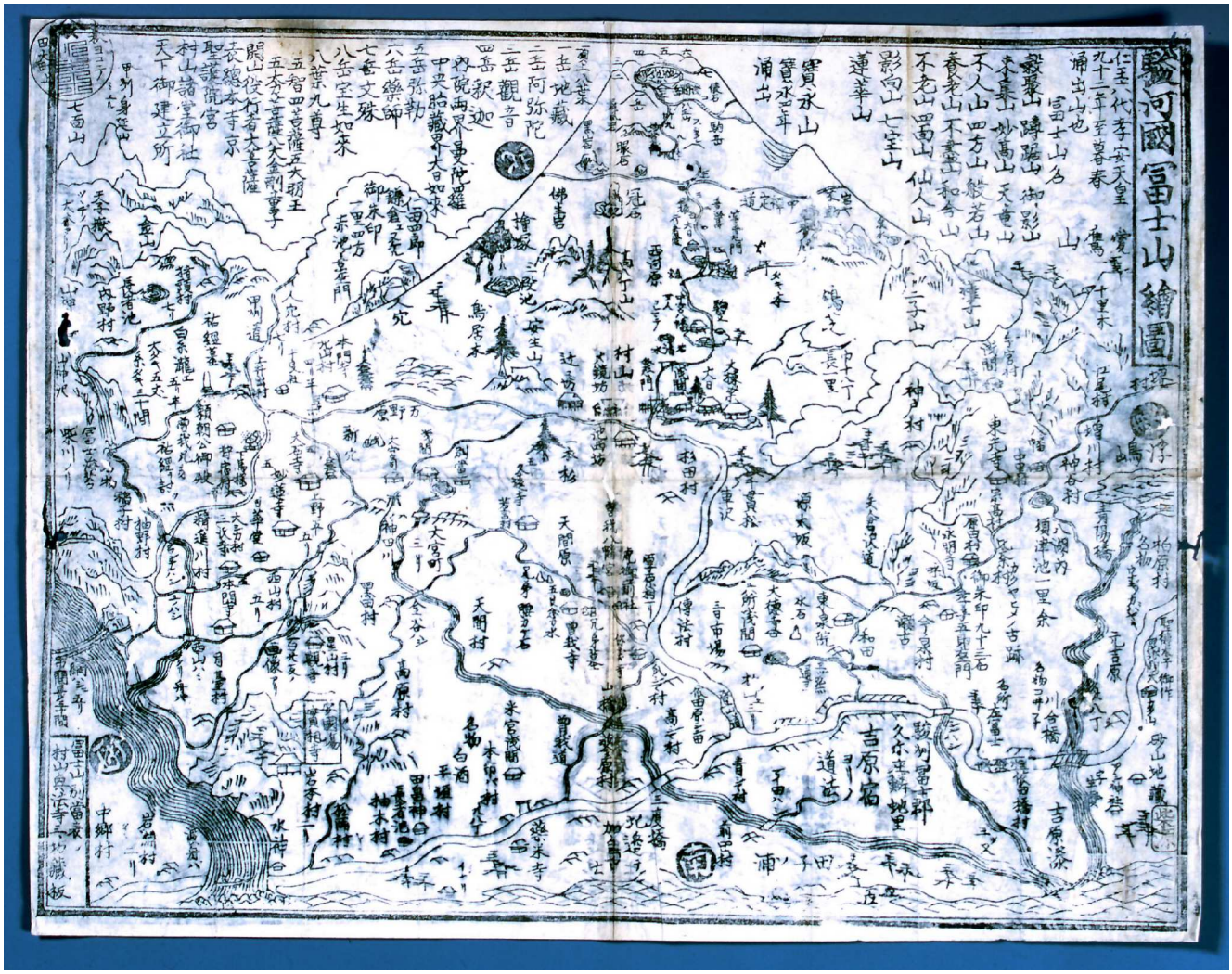
また、修験の作法にのっとって、村山から登山する「富士行者」は、7 日間の水垢離で身を清めてから登山することが定められていたが、後には水垢離だけで登山したのと同等であるとされたため、関西からの遠方の登山者は在地で水垢離を行うようになり、村山からの登山者がさらに減少してしまうこととなった。

この結果、江戸時代から近代にかけての富士登山の紀行文の中で、登山道沿いの壊れたままの宗教施設が描写されていることからも分かるように、村山は衰退の一途をたどることとなる[v]。

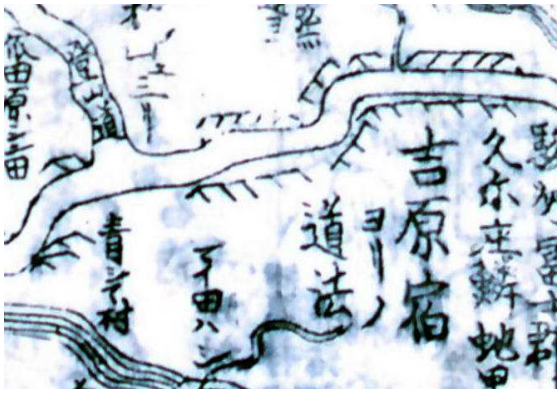
明治時代に入ると、神仏分離政策が進められ、富士山をめぐる信仰の世界から仏教色が排除されていくことになる。村山興法寺が管理してきた山頂の大日堂は、浅間大社に移って、現在の浅間大社奥宮となり、奉納されていた仏像などは、山頂から下ろされたり、首をそがれることとなった。明治 39 年（1906）には、村山を通らない新しい登山道が作られ、村山の登山道としての機能は失われ、歴史の舞台から姿を消すこととなった。

その存在が忘れられて久しい村山口登山道であるが、江戸時代後期に発行された『駿河国富士山絵図（村山興法寺三坊蔵版）』[vi]を見ると、吉原宿から村山を通り、富士山頂へと続く登山道と示されたルートが見て取れる。また、現在でも各地に村山口登山道を示す道標や石造物、建物跡が残っており、これらを結んでいくことによって、登山道の一部を窺い知ることができる。

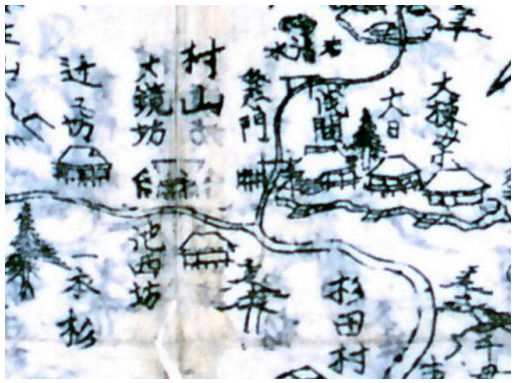
以下では、富士山プロジェクトに参加し、記録したデータをもとに、村山口登山道の姿を探ってみたい。



『駿河国富士山絵図(村山興法寺三坊蔵版)』　江戸時代後期　富士市立博物館蔵



吉原宿と登山道（抜粋）



村山周辺（抜粋）

3.吉原から村山へ

『駿河国富士山絵図（村山興法寺三坊蔵版）』（富士市立博物館蔵・以下富士絵図と略する）を見ると、吉原宿の西端より、東海道から分岐して北へ向かう登山道が示されている。吉原宿の西端は小潤川を渡る「志軒橋[vii]」（写真 1）であり、この橋が東海道と登山道の分岐点であったと考えられる。

富士絵図には、分岐後すぐに三日市場と記載されているが、現在の「富知六所浅間神社（三日市浅間神社）」（写真 2）周辺のことを示していると思われる。

志軒橋より三日市浅間神社を経て、伝法沢をまたぐようにして北上すると、富士市三ツ倉に、富士山を描いたと思われる山の姿と「東　三ツ倉　左　むら山道」という文字が刻まれた道標（写真 3）が残されている。

この道標のある分岐点を指示どおり左に向かってすすみ、「釈迦堂（しゃかどう）」（写真 4）をすぎてしばらくすると、二基目の道標（写真 5）に到着する。この道標には、一基目と同様に山の姿と「左」と「む」の文字が刻まれている。道標の指示に従いながら市境の道を進むと、三叉路の角に三基目の道標（写真 6）がある。これまでと同様に、山の姿に加え、「左」と「村山道」が刻まれている。次に残されている四基目、五基目の道標（写真 8、9）もまったく同じ形態をとっており、進行方向に向かって右へそれる道が存在するところに、道標が配置されていたようである。

また、三基目と四基目の道標の間には、馬頭観音の碑が二基並ぶ場所（写真 7）がある。そのうちの一基には、「宝永七庚寅年十一月　杉田村」と刻まれていることから、1700 年代にはこの道は登山道とともに、切り出した材木を馬を使って運搬する作業道としても使用されていたことが想像できる。

五基目の道標をすぎると、富士市から富士宮市に入ることとなる。道中には、馬頭観

音の碑が点在している（写真 10、11）。

富士宮市に入り、しばらく進むと、横沢の集落に入る。この集落内には、二基の道標（写真 12、13）が残されている。いずれも山の姿と「左」、「村山道（むら山道）」が刻まれている。

七基目の道標を過ぎると村山浅間神社（写真 14、15）に到着することとなる。志軒橋から村山浅間神社間まで、距離にして約 12 キロメートル、標高差約 460 メートルの行程であった。

写真 1：志軒橋

写真 2：富知六所浅間神社

写真 3：道標 1

写真 4：釈迦堂

写真 5：道標 2

写真 6：道標 3

写真 7：馬頭観音 1

写真 8：道標 4

写真 9：道標 5

写真 10：馬頭観音 2

写真 11：馬頭観音 3

写真 12：道標 6

写真 13：道標 7

4.村山から新六合目まで

村山浅間神社から新六合目のルートの分析については、富士宮市が市制五十周年記念事業「富士山村山口登山道の復活」の一環としておこなった「富士山村山口登山道跡調査」の報告書に詳細に記載されている。今回のプロジェクトもこの報告書をもとにしたルートを歩いている。それゆえに、本稿では、記録を集めることのできたポイントと、調査当時の登山道の状況から変化している場所についての紹介にとどめたい。

村山浅間神社の境内の西に富士山へと向かう登山道の入り口があり、登山道の入り口は、地元の人々による活動によって石畳が敷かれている（写真 16）。富士絵図によれば、このあたりに発心門（ほっしんもん）という記載が見られるが、その痕跡は小字として残っているに過ぎない[viii]。

石畳を越え、舗装された道をしばらく進むと、昭和八年に上原信郎によって建立された馬頭観音の碑（写真 17）へと到着する。これから天照教社（てんしょうきょうしゃ）までは、ヒノキやスギの植林地帯を進むこととなるが、この植林地の中に、札打場（ふだうちば）の大ケヤキ（写真 18）と呼ばれるポイントがある。『富士山村山口登山道跡調査報告書』によれば、山伏が入山する際に仏名神号を書き、行者の印号名を記した木札を打ちつけた場所であるという（富士宮市立郷土資料館、1993：11）。

この植林地帯は現在では民有地となっており、樹木を管理する道が入り組み、富士宮市による調査時と同様に明確に登山道を確定することは困難となっている。

天照教社から静岡県立富士山山麓の村を経て中宮八幡堂（ちゅうぐうはちまんどう）へ至る道中に入ると、自然林が所々に見られるようになる。富士山山麓の村をすぎると、富士市に入り、しばらくは有志の個人や団体によってしっかりと整備された道を進むこととなる。この間には、苔むした馬頭観音の碑（写真 19）が一基残されていたが、スズタケ等の下草が繁茂すれば、登山道の判別は困難となる。

馬頭観音を越えると再び富士宮市に入ることとなる。大渕林道との交差点を過ぎ、しばらく進むと、中宮八幡堂（写真 20）にでる。中宮八幡堂の名は、富士絵図にも記載されているほか、昭和初期の地図にも記載されているという（富士宮市立郷土資料館、1993：11）。現在、ここはしっかりと整備され、祠が建立されている。現地に建っている案内板（写真 21）には、以下のように記されている。

「中宮馬返しとも言われ、村山より派遣された社人が常駐しており、登山者の総ては、ここより馬で登ることは許されなかった。付近に女人堂（にょにんどう）があり、女性の登山はここまで

で禁止され、女人堂に篭って頂上を拝み下山した。（中略）明治 37、8 年頃までは茅葺き屋根の社屋、馬立小屋、杖小屋等が存在していたが、村山登山道の衰微により、倒壊してしまった。当時、登山期には村山より出張った堂守の社人が付近の山中より切り出した雑木で作った杖を登山者に交付した。（中略）現在の八幡堂の祠は平成九年篤志家のご協力を得て創建したもので、祭典は、毎年十月の最終日曜日に、村山登山道探索会と併せて行われている。」

中宮八幡堂を出発すると、富士市内に入り、それまで緩やかであった傾斜が徐々にきつくなってくる。20 分ほど歩くと、表富士周遊道路（富士山スカイライン）に出る。スカイラインを通過し、40 分ほど進むと、再びスカイラインと合流することになる。スカイラインとの交差点には、標高 1600 メートルの標識と、「村山口登山道案内図」（写真 22）が立てられており、ここから新六合目までの間に多くの建物跡が存在することが示されている。

案内図に示されている大樅小屋跡までは、今回の登山時には下草が刈り払われ、比較的歩きやすい道であったが、下草が繁茂すればその道を判別することは非常に困難になる。1600 メートルの標識から、しばらく歩くと「大樅小屋跡」（写真 23）に到着する。ここには茶碗のかけらが残されている。『富士山村山口登山道跡調査報告書』によれば、この地点は「矢立・新小屋」と呼ばれる場所である可能性と、木材を伐採・搬出するために後世に作られた小屋の跡である可能性の二つを指摘している(富士宮市立郷土資料館、1993：16)。

小屋跡を過ぎると、勾配がきつくなり、林床の植生がスズタケからカニコウモリへと変化してくる。標高 1800 メートルを過ぎると、あたりの景色が一変する。このあたりは、台風の被害を受けた倒木帯（写真 24）が広がっており、道や建物跡を判別することは不可能な状態となっている。そのため、プロジェクトに同行した登山では富士宮市による調査や案内板で示されていた瀧本不動跡（たきもとふどうあと）、笹垢離小屋跡（ささごりこやあと）、首無石仏三体[ix]、横渡しといった場所の記録を採ることはできなかった。

倒木帯は、富士市と富士宮市の境となる日沢（にっさわ）を渡ることによって、抜ける事ができる。倒木帯を抜け、傾斜のきつい針葉樹の森の中を進むと、標高 2170 メートルのあたりに、『富士山村山口登山道跡調査報告書』で記載されている「室大日堂（むろだいにちどう）・木戸室・茶屋室」にあたる場所が開ける（写真 27）。この場所は、大日如来と役行者（えんのぎょうじゃ）像が祀られ、末代が建立した往生寺があったとされる(富士宮市立郷土資料館、1993：17)。平坦な場所への入り口には石組みが確認できる（写真 28）。

その後、標高 2350 メートル地点には二合目跡とされる石垣（写真 29)、宝永遊歩道との交差点から少し登りあげた標高 2400 メートル地点には､三合目跡とされる石垣(写真 30）が残されている。三合目には便所跡と思われる直径 1 メートル程度の丸い穴も確認することができた。

このあたりに来ると樹高が徐々に低くなり､富士山の森林限界に近づいてきたことがわかる。森林限界を過ぎると視界が広がり、新六合目の小屋の真下に出てくることとなる。この新六合目は村山口登山道の四合目にあたるとされ、このポイントで、現在の登山道と合流することとなる。

村山浅間神社から新六合目まで、距離にして約 13 キロメートル、標高差約 2000 メートルの行程であった。

写真 14：村山浅間神社

写真 15：登山道脇の石碑

写真 16：登山道入り口の石畳

写真 17：馬頭観音４

写真 18：札打場の大ケヤキ

写真 19：馬頭観音 5

写真 20：中宮八幡堂

写真 21：中宮八幡堂案内看板

写真 22：登山道案内図

写真 23：大樅小屋跡

写真 24：倒木帯

写真 25：瀧本・笹垣離跡

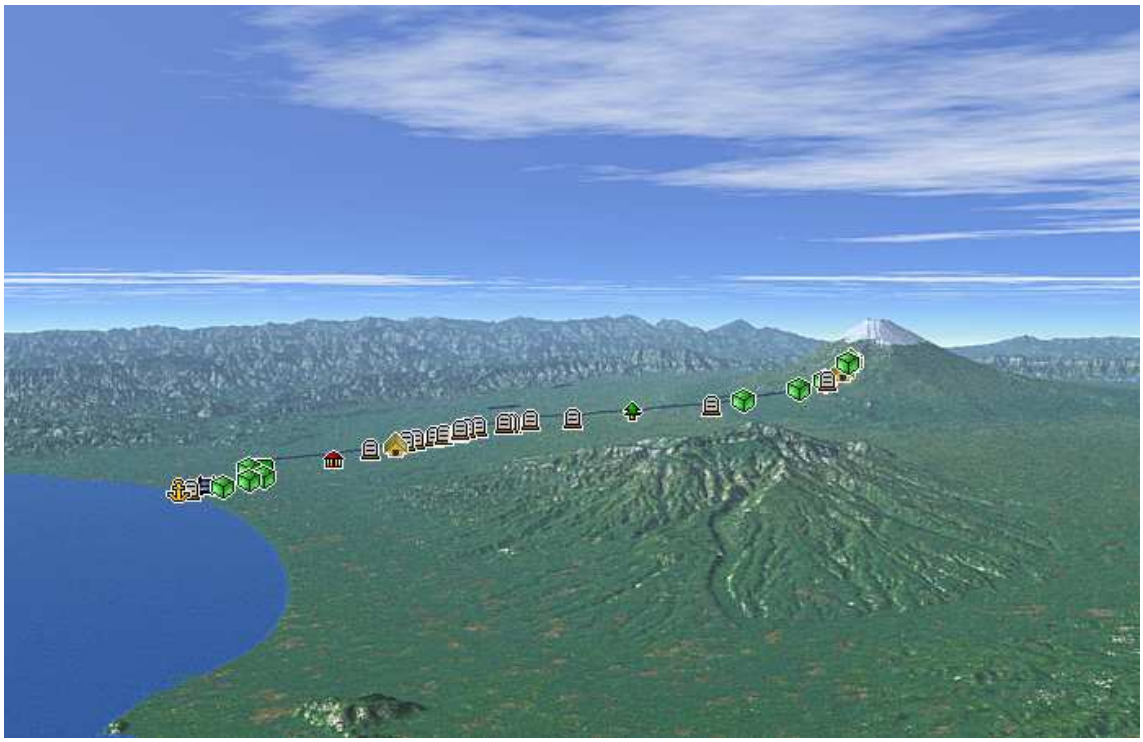
写真 26：瀧本・笹垣離跡の不動明王

写真 27：室大日堂・木戸室・茶屋室跡

写真 28：室大日堂・木戸室・茶屋室跡の石組み

写真 30：三合目跡

写真 29：二合目跡



富士山および村山口登山道鳥瞰図（イメージ）：カシミール 3D を使用

表 1：ルート上の石造物およびポイントの詳細

名称	写真番号	緯度	経度	標高	備考
志軒橋	1	N35.09.30.78	E138.40.56.04	10	
道標1	3	N35.11.40.02	E138.40.45.96	166	左 東三ツ倉 村山道
釈迦堂	4	N35.12.19.14	E138.40.29.58	173	
道標2	5	N35.12.36.18	E138.40.18.48	197	左 む
道標3	6	N35.12.52.38	E138.40.10.20	228	左 むら山道
馬頭観音1	7	N35.13.14.82	E138.40.08.94	246	宝永七年庚寅年十一月 杉田村
道標4	8	N35.13.27.24	E138.40.06.60	257	左 村山道
道標5	9	N35.13.53.76	E138.39.55.20	296	左 村山道
馬頭観音2	10	N35.14.22.56	E138.39.49.80	339	
馬頭観音3	11	N35.14.24.66	E138.39.47.16	348	
道標6	12	N35.14.51.30	E138.39.59.88	401	左 村山道
道標7	13	N35.15.00.72	E138.40.02.76	414	左 むら山道
村山浅間神社	14,15,16	N35.15.27.06	E138.40.09.24	475	
馬頭観音4	17	N35.15.52.09	E138.40.51.05	588	昭和八年 上原信郎
札打場の大ケヤキ	18	N35.16.24.03	E138.42.05.02	842	
馬頭観音5	19	N35.16.57.01	E138.43.14.02	1084	
中宮八幡堂	20,21	N35.17.47.05	E138.43.45.05	1262	
登山道案内図	22	N35.18.39.30	E138.44.24.50	1600	
大樅小屋跡	23	N35.18.58.60	E138.44.30.20	1712	

瀧本･笹垢離跡	25,26	N35.19.14.60	E13844.38.90	1864	不動明王：文化六巳□年 富士山表口瀧本前不動明王 施主□□大願成就世話人 八月ホ八日　木切　山上村　定七 地蔵1：大宮角田屋　佐野与一 二又村　世話人　□蔵 地蔵2：角田屋施主大宮□右衛門 高村与一　世話人二又　□蔵
室大日堂･木戸室･茶屋跡	27,28	N35.19.46.10	E138.44.35.50	2173	
二合目跡	29	N35.19.58.90	E138.44.30.00	2356	
三合目跡	30	N36.20.01.30	E138.44.30.10	2399	

5.おわりに

近年、多くの人々に注目されている村山口登山道について、上記のような記録を集める機会に恵まれ、現在の村山口登山道の状況を把握することができた。富士宮市が 1993 年に行った調査時と同様に、明確に登山道を確定することはできないけれども、おぼろげながらその姿を知ることが可能となった。しかし、今回のプロジェクトと倒木帯における石造物調査は、村山口登山道についてこれまで活動されてきた熟練の登山者の先導のもと、国有林については関東森林管理局静岡森林管理署の入山の許可を得て行われたものである。

特に、村山浅間神社から新六合目にかけては、一部が有志の方々によって整備されているとっても、一般的な登山道のようにルートが示されている状態になっているわけではなく、また、登山道と似たような木馬道（木材運び出しのため、丸太を敷き並べ、木馬を滑走させる道）の跡や管理道が入り組み、道に迷う可能性のある状態となっている。また、私有地内を通行する際の問題のほか、水場やトイレを確保することが困難な状況であり、富士山の他の登山道のように気軽に登山を行うことができるような状態ではないこともひろく知ってもらう必要がある。

こうした状態の村山口登山道であるが、富士山の世界文化遺産登録へ向けての活動が活発となっている現在、どのように村山口登山道の保存と活用をはかっていくかについての動きを見守りたい。

最後に、村山口登山道に関する記録を集める機会を提供していただいた富士山クラブの方々および篠原豊氏、国有林の入山を許可していただいた関東森林管理局静岡森林管理署に深い感謝の念を表したい。

---

[i] 『富士山吉田口登山道関連遺跡 II』によれば、富士山の噴火について文献に記されたのは『続日本記』天応元年(781)7 月条に「駿河国。富士山下雨灰」とあるのが初見であり、『日本略記』では園暦 19 年(800)の噴火を「富士山巓自焼」、『三代実録』では貞観 6 年(864）の大噴火を「富士郡正三位浅間大神大山火」と伝えているという（富士吉田教育委員会、2003：1)。また、『富士山の自然と砂防』によれば、奈良時代から平安時代（710 年の平城京遷都から 1184 年の源頼朝による公問所・問注所の設置）までの約 500 年の間に、12 回の噴火記録を数えることができる（富士砂防二十周年誌編集委員会、1990：131)。

[ii] 富士大宮司・和邇部(わにべ)民済が記した『富士本宮浅間社記』によれば、第 11 代垂仁天皇が富士山の神の怒りを鎮めるために、山足の地（麓）にその神を祀り、その後、景行天皇の時に日本武尊がその神霊を山宮の地（現在の山宮浅間神社）に下ろしたとされている。さらに、平城天皇の大同元年(806)に征夷大将軍・坂上田村麿によって、現在の富士宮市の福地明神の社地に浅間神社を遷し、壮大な社殿を創建したという（富士市立博物館、1995：7-8)。

[iii] 『駿河国新風土記』の中で、「富士山大縁起ニ興法寺ハ末代上人ノ営ムトコロトイヒ‥」という記述や、「大棟梁（末代の即身仏としての名前）ト号シ、此山ノ守護神トナルト云ル社、今ニ村山浅間ノ傍二、大棟梁権現ノ社アリ。村山ノ三坊ノ山伏、辻之坊(つじのぼう)ハ浅間社、池西坊(ちせいぼう)ハ大日堂、大鏡坊(だいきょうぼう)ハ大棟梁権現ト分テ別當ナリ。」といった記述があることから、末代が建立した寺が村山興法寺であることはほぼ間違いないとされている（富士市立博物館、1992：11-12）

[iv] 修験者は、行者として村山の山伏とともに一定期間富士山に入る修行を行い、山伏の段位を受けることができる。これを繰り返すことにより、先達となり、多くの行者を連れて富士登拝を指導することができるようになる。

[v] 文政年間に記された『駿河国新風土記』によれば、15 世紀の村山の戸数は 600 を数えたが、18 世紀中頃には 70 戸、文政 9 年（1826）に至っては山伏社人のほかに、民戸二煙となったという（富士市立博物館、1992：17)。

[vi] 江戸時代以降にみられる村山を訪れる道者の減少は、山役銭（登山者から徴収する税金）や宿坊への宿泊の減少を意味した。これを危惧した興法寺は、村山へ立ち寄る道筋を示した案内絵図を製作して頒布し、村山を経由して登山する道者の確保を試みたようである。

[vii] 志軒橋の表記方法には、「四間橋（橋の長さが四間（約 7.2 メートル）あった)」とする説や、「四軒橋（橋の周りに家が四軒あった)」とする説があるが、本稿では、ゼンリ

ン住宅地図（富士市東部、2002 年発行）に記載のある「志軒橋」という表記に従う。

[viii] 『富士山村山口登山道跡調査報告書』によれば、昭和 50 年代までは発心門の基礎が残っていたが、その後持ち出され、その位置を確定することができないという（富士宮市立郷土資料館、1993：10-11）。

[ix] 後日、富士山を中心とした登山活動を行っている篠原豊氏（富士市在住）より、倒木帯の中に、石造物を発見したとの連絡を受け、篠原氏とともに、状況調査に向かった。その結果、倒木帯内、標高 1860 メートルの地点に、四基の石造物（地蔵三体、不動明王一体、写真 25、26）を確認することができた。いずれも頭部が切り離され（うち二体は頭部無し）、明治期の廃仏毀釈運動によって、壊されたと考えられる。

この発見された石造物のうち、不動明王に「富士山表口瀧本前」と刻まれていることからも、この場所が『富士山村山口登山道跡調査報告書』で記載されている「瀧本・笹垢離」にあたる場所だと考えられる。

＜参考文献＞

国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所　2002　『富士山の自然と社会』　国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所
富士砂防二十周年誌編集委員会　1990　『富士山の自然と砂防』　建設省富士砂防工事事務所
富士市立博物館　1995　『第 30 回企画展　富士山信仰と富士塚』　富士市立博物館
富士市立博物館　『常設展示解説シート　No.11』　富士市立博物館
富士塚調査研究委員会　1996　『富士塚調査報告書』　富士市立博物館
富士宮市史編纂委員会　1971　『富士宮市史（上）』　富士宮市
富士宮市立郷土資料館　1993　『市制 50 周年記念事業　　富士山村山口登山道跡調査報告書』　富士宮市教育委員会
富士文化財愛好会　1986　『富士市の石造文化財（第 2 集）～大淵・伝法・吉原地区調査概要～』　富士市教育委員会
富士吉田市教育委員会文化振興課　2001　『富士山吉田口登山道関連遺跡』　富士吉田市教育委員会
富士吉田市教育委員会歴史文化課　2003　『富士山吉田口登山道関連遺跡 II　－歴史の道整備活用推進事業に伴う調査報告書』　富士吉田市教育委員会